

平成 30 年度 発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業
(特別支援教育の視点を踏まえた学校経営構築研究開発事業)
成果報告書

実施機関名 (学校法人金光藤蔭高等学校)

1. 問題意識・提案背景

《生徒・家庭の実態》

1. 家庭や成育歴等に課題を抱えている生徒が多い
2. 自尊感情の低い、居場所感がない生徒が多い
3. 発達に課題を抱える生徒や不登校傾向の生徒が多い
4. 孤立傾向の保護者が多い(子育てに関する相談相手の不在)

《本校の教員の実態》

1. 各教員が様々な取組を行っているが、同じ学年や交流の多い教員グループの中だけで共有されているため、全体の共通理解に乏しい
2. 各教員が自分の信念や理論をもっているが、それがユニバーサルデザインかどうかは見直す必要がある

2. 目的・目標

本校の実態と課題から、特別支援教育の視点を教育活動のベースにした学校体制の構築が必要だと考えた

1. 教員一人ひとりの意識が変わることで、全生徒への合理的な配慮をベースとした質の高い教育活動の展開を目指す《教員の意識改革》
2. 組織としての意識にも変化をもたらし、「面倒見の良い熱心な先生がいる学校」から、「面倒見のよい熱心な学校」へと成長する《学校体制の構築》

3. 主な成果

- (1) 生徒に対する成果(家庭や成育歴等に課題、自尊感情が低い、居場所感がない、発達に課題を抱えている、不登校傾向)

① コンサルテーション

発達障害に関する教職員の理解啓発・専門性向上と個別の教育支援計画・個別の指導計画作成・運用に向けて、今年度も授業見学からコンサルテーションにつなげた。生野支援学校支援コーディネーターの先生のコンサルテーションにおける助言・指導は日ごろの教育活動、生徒支援において大いに役立ち、支えとなった。教員自身安心感のある中で生徒への関わりが、生徒にとっても良い成果をもたらされると考えられる

② COCORO カフェの活動

生徒に弱音や悩みを話せる大人の存在を身近に感じてもらうこと、「心の居場所」をキーワードに、つまずきや悩みを抱えている生徒の支援を早期の段階で行うことを目的に、週2回、生徒たちの居場所づくりとしてのカフェ活動を行っている。不登校傾向の生徒や、コミュニケーションをとることが苦手な生徒が多く利用している。生徒一人ひとりの発達課題に応じてスタッフの奈良女子大学大学院生による自尊心

情を高めるようなワークやソーシャルスキルトレーニングなども取り入れている。
今後、居場所づくり以上の成果を期待している。

(2) 保護者に対する成果（孤立傾向の保護者が多い、子育てに関する相談相手の不在）

①COCORO 食堂の活動

学校と家庭の関係を“切らない・育む・深める”こと、学校生活を送るうえでサポートが必要な保護者同士が交流を深めるなかで、保護者自身の孤独感を減らすこと、保護者と教員の交流を通して、家庭と学校が連携し、生徒のサポート関係を構築することを目的に、平成30年度は4回実施した。今後もアンケートを実施したり聞き取りをしたりして、保護者の要望に応えられるよう活動の幅を広めていきたい。

②COCOROの部屋（個別カウンセリング）の活用

週1回 奈良女子大学教授 伊藤美奈子先生によるカウンセリングを実施している。
（利用対象は、生徒・保護者・教職員）
開室して4年目となるが、その利用効果は高まってきている。事態が深刻化する前に、カウンセリングを利用することで、結果的には転退学防止の一役を担っていることもある。

COCOROの部屋 利用状況（平成27年4月1日～平成31年3月31日）

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
平成 27年度	生徒	1	0	4	1	0	6	10	5	2	1	4	0	34
	保護者	2	1	5	2	0	6	9	2	2	2	0	0	31
	教職員	1	3	6	3	1	5	4	0	1	1	0	0	25
	計	4	4	15	6	1	17	23	7	5	4	4	0	90

開設なし

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
平成 28年度	生徒	2	1	3	1	0	0	2	5	2	11	2	2	31
	保護者	3	1	2	2	0	0	4	3	0	0	1	1	17
	教職員	0	5	10	1	0	1	8	5	1	1	1	0	33
	計	5	7	15	4	0	1	14	13	3	12	4	3	81

開設なし

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
平成 29年度	生徒	2	4	5	2	0	6	8	3	0	2	0	2	34
	保護者	2	4	1	1	0	1	2	1	1	4	4	5	26
	教職員	3	0	1	0	0	1	3	0	0	1	1	5	15
	計	7	8	7	3	0	8	13	4	1	7	5	12	75

開設なし

		H30	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
平成 30年度	生徒		5	9	10	2	0	9	15	11	0	4	0	2	67
	保護者		1	5	4	4	0	3	4	6	3	0	1	3	34
	教職員		2	3	0	0	0	0	3	1	0	2	1	1	13
	計		8	17	14	6	0	12	22	18	3	6	2	6	114

開設なし

(3) 教員に対する成果

①研修

校内研修では「個別の教育支援計画作成のポイント～発達障害を持つ生徒の理解と支援に向けて～」と題して生野支援学校のコーディネーターに講師を依頼し、実施

1. 日 時 平成 30 年 5 月 21 日 (月) 11 : 30～13 : 00
2. 場 所 第 1 情報室
3. 研修テーマ 「個別の教育支援計画作成のポイント～発達障害を持つ生徒の理解と支援に向けて～」講師：大阪府立生野支援学校 三木先生

②アンケート

各教育活動における日頃の取組に関する教職員対象のアンケートを実施した。
合理的配慮の提供に係る体制整備の在り方を全教職員で考えるきっかけとなった。

※アンケート結果 資料 A

4. 教育委員会及び指定校における取組概要

【学校種：高等学校】

① 専門家を活用した学校経営計画等の策定 (指定校の取組)

コンサルテーション I

- 日 時 平成 30 年 5 月 28 日 (月) 3 限～4 限
専門家 大阪府立生野支援学校コーディネーター 3 名
内 容 授業見学・振り返り
※授業見学対象者 46 名

大阪府「支援教育地域支援整備事業」推進体制のリーディングスタッフとして、支援教育課を通して生野支援学校から派遣されたコーディネーターとの連携。

コンサルテーションから、個別のニーズに応じた支援の方法を相談し、より具体的な個別の支援につなげる。

コンサルテーション II

- 日 時 平成 30 年 6 月 12 日 (火) 16 時
専門家 大阪府立生野支援学校コーディネーター 2 名
内 容 コンサルテーションをまとめた行動観察表を基に
・個別の現状の支援の確認
・今後支援が必要な生徒の相談

きめ細やかな行動観察による専門家のアドバイスは今後の支援体制の大きなヒントが得られる貴重なものである。さまざまな角度からの観察は生徒の実態把握に役立ち、教員の意識改革につながってきている。

コンサルテーション III

- 日 時 平成 30 年 7 月 23 日 (月) 15 時
専門家 大阪府立生野支援学校コーディネーター 3 名
内 容 コンサルテーション II で支援が必要とされた生徒 4 名についての指導に際しての助言等を、それぞれの担任および教育支援部で聞き取る。

その後、上記の4名のうちの1人の生徒の発達検査等を行ってもらい、支援方針を相談することになった。

(主な成果)

生野支援学校のコーディネーターの先生のコンサルテーションにおける助言・指導は日ごろの教育活動、生徒支援において大いに役立ち、支えとなるものになった。教員自身が安心感のある中で生徒と関わることが、生徒にとっても良い成果をもたらすと考えられる。

本事業終了後も、生野支援学校との連携の中で、提案していただいた支援の年間計画をもとに、コンサルテーションや研修を実施予定である。

本校の支援教育活動は、発展・充実しつつある。

② 合理的配慮の提供に係る体制整備の在り方

(指定校の取組)

(1) 入学前面談の聞き取りシートの改変

入学前面談の重要性を鑑み、面談聞き取り簿をより良いものに改編し、必要な支援をいち早くスタートできるように工夫した。

平成31年度入学生 入学前面談について

1. 実施目的：
 - ①生徒・保護者と本校教員の顔合わせと、高校生活を迎えるにあたって現在抱いている不安や期待を共有すること
 - ②これまでの学びや育ちを引き継ぎ、安心して高校生活をスタートできるようなサポート体制をつくること
 2. 対象生徒：
 - ①具申書のある生徒（エンカレッジコース・その他）
 - ②その他（中学校教員からの引き継ぎ等）
 3. 実施日：平成31年3月4日（月）～3月22日（金）までの11日間 ※1家族約30分
 4. スケジュール
 - ①対象生徒に案内をだし、日程調整をする 2/13
 - ②渉外担当（全員）から対象生徒の情報を聞き取る 2/14
 - ③具申書、②をもとに「入学前面談対象生徒カルテ」を作成する 2/26～3/1
 - ④面談実施 3/4～3/22
 - ⑤面談をもとに、コース担当者が「入学前面談対象生徒カルテ」の入力 3/25
 - ⑥「入学前面談対象生徒カルテ」を担当に配布 3/29
 - ⑦担任は「入学前面談対象生徒カルテ」「高校生活カード」「保健調査票」等をもとに「個別の教育支援計画」の作成に取り掛かる 4/4
 - ⑧担任は新学期の二者面談等を通して「個別の教育支援計画」に追記する 4/26（随時）
 - ⑨「個別の教育支援計画」を確認し、必要に応じて各部署と連携して活動する
 5. その他
上記の「個別の教育支援計画」作成と同時並行で、各担任は二者面談や保健調査票をもとに「健康調査書」（全学年）を作成する 4/26
-

【改編した入学前面談聞き取りシート（個人カルテ）】

2019(平成31)年度入学前面談対象生徒 個人カルテ

ふりがな 生 徒 名 前	性別	受験番号	入学コース ☐ TS・ ☐ LC・ ☐ BC・ ☐ IT・ ☐ AA・ ☐ TA
生 年 月 日	生 出 身 校	中学校	
保 護 者 名 前	住 居 所	〒 区	
入学前面談実施 ☐ 済 ☐ 未	家 庭 ☐ 本人 ☐ 母 ☐ 父 ☐ その他 ()		
学 校	面 談 日 平成 31 年 3 月 5 日	記 載 者	

●中学校からの事前引き継ぎ(具申書等)● (具申書 ■ 有 ・ □ 無)

具申書	
校外担当	

●中学校での配慮のきっかけ●

区 分	チェック欄 (○印)	備 考
学校に係る状況	いじめ	
	いじめを除く友人関係をめぐる問題	
	教職員との関係をめぐる問題	
	学業の不調	
	進路に関心する不安	
家庭に係る状況	部活動等への不満足	
	学校生活への不満足	
	入学・転編入学・進級時の不満足	
	その他	
	家庭の生活環境の急激な変化	
本人に係る状況	親子関係をめぐる問題	
	家庭内の不和	
	時気	
	障がい	
	クオガ	
不明		

●関係機関との連携・協力・支援ネットワーク●

教 育	主な利用者	機関名	時期	頃～	現在	☐ 継続中 ☐ 終了	備考
医 療	主な利用者	機関名	時期	頃～	現在	☐ 継続中 ☐ 終了	備考
福 祉	主な利用者	機関名	時期	頃～	現在	☐ 継続中 ☐ 終了	備考
その他	主な利用者	機関名	時期	頃～	現在	☐ 継続中 ☐ 終了	備考

●家族構成● 本人から見て

☐ 父親 ☐ 母親 ☐ 祖父 ☐ 祖母 ☐ 兄 (人) ☐ 姉 (人) ☐ 弟 (人) ☐ 妹 (人) ☐ その他 () 主に連絡を取り合っている家族 ()	特記事項
---	------

●全般(これまでの育ちや学び等)●

進 学 前	成 育 歴 (成長・発達等)	
小 学	保 護 者 の 不 安 等	
中 学	保 護 者 の 不 安 等	
高 校	保 護 者 の 不 安 等	
現 在	保 護 者 の 不 安 等	
そ の 他	保 護 者 の 不 安 等	

●高校生活を迎えるにあたって～現在の心境等～●

	本人	保護者
学 習	不安・心配 (希望)配慮 願い・期待	
学 校 生 活	不安・心配 (希望)配慮 願い・期待	
友 人 関 係	不安・心配 (希望)配慮 願い・期待	
そ の 他	不安・心配 (希望)配慮 願い・期待	

金沢師範高等学校 教育支援部

(2) 健康調査書の改編

健康調査書とは、各担任が入力し、教育支援部で編集し、全教職員で共有する要配慮の生徒一覧である。まず作成に関して以下のような内容の要項を配布する。

- 目 的：日常の学校生活を送るうえで、身体上またはその他において特に配慮を必要とする生徒の実態把握とその情報をもとに安全な学校生活を送れるようサポートを行うため
- 方 法：共有フォルダ内にあるクラス別シートに入力
- 記入対象生徒

学校生活を送るうえで全教職員が共有しておかなければならない疾病や障害または特性を持つ生徒、指導上の配慮が必要だと思われる生徒
- その他：①疾病や障害の診断名がある場合は記入してください。※不明な場合は空白
 ②できる限り、具体的に書いてください。(最新の状況をお願いします。)
 ③障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳などを所持している場合は、手帳の種類と等級(区分)、障害の程度について把握できている範囲で記入してください。
 ④ A～D 欄の有無に関しては「有：○」「無：×」で記入してください。

【改編した健康調査書】

平成 30 年度健康調査書では、中学校や保護者等から引き継いだ生徒の学びや育ちを記載した

第1学年					2018(平成30)年度					
組	番	ふりがな	性別	中学校	状況・配慮事項等	診断名・障害名	手帳の有無	具申書 引継等 有無	個別の 支援計画 作成 対象者	備考
		名 前				連携機関等 (医療・福祉・教育等)				
			男		右手の自由がきかない 体育、柔道では配慮が必要である	脳性麻痺片麻痺	身体障害者手帳	○	○	
			男		頭痛、吐き気などの体調不良が多い	糖尿病 高度肥満	右上肢機能全廃(2級)	○	○	
			男		視覚優位で、口頭での説明は理解しづらい		療育手帳 B2	○	○	支援学級 在籍

平成 30 年度健康調査書には、本校教職員に客観的に本校生徒の実態を把握してもらいたいという願いから項目別に数値化した資料を添付した

秘

《資料》

1. 今年度、健康調査書に記載されている生徒

	文理進学 文理特進	エンカレジ	IT メディアアート	アートアニメーション メディアアート	ライフクリエイティブ	トップアスリート	合計
1 学年	3	18	7	6	30	8	72
2 学年	2	10	11	9	13	2	47
3 学年	1		4	6	18	2	31
合計	6	28	22	21	61	12	150

2. 入学時に具申書および引継ぎ等があった生徒(中学校・保護者より)

	文理進学 文理特進	エンカレジ	IT メディアアート	アートアニメーション メディアアート	ライフクリエイティブ	トップアスリート	合計
1 学年	0	35	1	5	4	1	46
2 学年	2	28	6	2	2	0	40
3 学年	1		2	0	1	0	4
合計	3	63	9	7	7	1	90

3. 障害者手帳等を所持している生徒(学校で把握できている者)

	障害者	療育(B2)	精神障害者 保健福祉	その他 (種類不明)	合計
1 学年	1	6	0	0	7
2 学年	2	3	0	1	6
3 学年	0	3	0	0	3
合計	3	12	0	1	16

4. 個別の支援計画作成対象生徒

	文理進学 文理特進		エンカレジ		IT メディアアート		アートアニメーション メディアアート		ライフクリエイティブ		トップアスリート		合計	
	全体	(中学)	全体	(中学)	全体	(中学)	全体	(中学)	全体	(中学)	全体	(中学)	全体	(中学)
1 学年	0	(0)	35	(2)	1	(1)	1	(0)	3	(0)	1	(1)	41	4
2 学年	2	(1)	28	(0)	3	(3)	0	(0)	2	(1)	0	(0)	35	5
3 学年	0	(0)			0	(0)	0	(0)	5	(0)	1	(0)	6	0
合計	2	1	63	2	4	4	1	0	10	1	2	1	82	9

※()内の数字は中学校より個別の支援計画が引き継がれた生徒の人数です。()の人数は全体の人数の中に含まれています。

5. 定期考査での配慮が必要な生徒

	文理進学 文理特進	エンカレジ	IT メディアアート	アートアニメーション メディアアート	ライフクリエイティブ	トップアスリート	合計
1 学年	0	1	0	0	0	0	1
2 学年	0	0	1	0	0	0	1
3 学年	0		0	0	0	0	0
合計	0	1	1	0	0	0	2



	所属	名前	コース	受験場所	配慮事項
1	年 組 番		EC	応接室	時間延長、問題拡大
2	年 組 番		IT	応接室	時間延長、拡大鏡の使用

(3) 学習支援係の新設

校内体制として「学習支援」係を新たに設けた。

教務部と連携し、認定生徒・長欠生徒等に対する学習支援や学習支援の構築を行う。

校内で連携のとれた体制の中で生徒をサポートしていく環境を整えた。

(主な成果)

昨年度まで使用していた面接聞き取りシートを改編し、個人カルテとして使用することとした。速やかに支援をスタートさせるために、また「個別の教育支援計画」につなげるためにも大変効果のある改変となった。面接者全員がこのカルテをもとに面接を行うことで、面接者によって質問内容が大きく変わることや、聞き逃す項目をなくす効果も得られた。このことにより、合理的配慮の必要な生徒を早い段階で把握し、対応することができた。また、健康調査書の改編は、教職員にとって把握しやすく見やすいものとなり、スムーズな支援につながった。そして、学習支援係が設置され、ますます学校全体での支援体制が定着してきたといえる。

③ 発達障害等の可能性のある生徒を取り巻くいじめの防止、不登校対策等の生徒指導上の学校課題に対する体制整備の在り方

(指定校の取組)

(1) COCORO カフェ（校内カフェ）の取組

・目的

①生徒に弱音や悩みを話せる大人の存在を身近に感じてもらうこと

②「心の居場所」をキーワードにつまずきや悩みを抱えている生徒支援を早期に行うこと

・活動形態

・オープン日：週2回放課後(16:00～17:30)

・スタッフ数：今年度7人(奈良女子大学大学院生)

・その他：通常カフェ、特別企画、オープンスクール&入試説明会

・利用状況(H30.2.28現在)

①通常カフェ

表1. 通常のCOCOROカフェオープン回数と利用状況(月別)

(単位：人)

月	オープン回数	1 学年		2 学年		3 学年		合計
		男子	女子	男子	女子	男子	女子	
4 月	4 (4)	4 (2)	5 (10)	9 (4)	25 (0)	0 (0)	1 (2)	44 (18)
5 月	6 (4)	3 (5)	7 (10)	3 (2)	7 (0)	0 (0)	2 (0)	22 (17)
6 月	8 (9)	3 (18)	4 (35)	2 (3)	4 (0)	0 (9)	2 (0)	15 (65)
9 月	7 (7)	9 (13)	3 (27)	0 (0)	9 (0)	0 (7)	1 (0)	22 (47)
10 月	5 (6)	6 (14)	2 (41)	5 (0)	3 (1)	1 (6)	0 (0)	17 (62)
11 月	4 (6)	4 (11)	1 (31)	5 (0)	3 (0)	0 (7)	0 (0)	13 (49)
1 月	5 (6)	5 (13)	2 (38)	7 (0)	1 (3)	0 (13)	0 (0)	15 (67)
2 月	4 (4)	4 (7)	3 (24)	4 (0)	0 (2)	0 (7)	0 (0)	14 (40)
合計	43 (46)	38 (83)	27 (216)	35 (9)	52 (6)	1 (49)	6 (2)	159 (365)

※7月、8月、12月、3月は開設せず

※()の数字は昨年度の実績数

②特別活動

- ・実施回数：2回
- ・内 容：EC コースクラス開き、藤蔭祭での「出張！COCORO カフェ」

活動名	内容
EC コース/クラス開き	平成 30 年 4 月 21 日（土） 4 限目 集団ワーク
藤蔭祭「出張！COCORO カフェ」	平成 30 年 11 月 2 日（金）性格検査とコラージュ体験

③その他

- ・入試広報部からの依頼で、オープンスクール（3回）と入試説明会（4回）で開催

内容
個別相談の待ち時間を利用して中学生に COCORO カフェ体験をしてもらった。生徒が COCORO カフェ体験中の保護者対応は担当教員が行った。（生徒と保護者に分かれて着席） ※入試説明会の時には教務部部长にも保護者対応に協力してもらった。※担当教員だけでは対応できないくらいの参加者数であったため、何名かの先生に急きょ協力してもらった。

（2）COCORO 食堂（保護者交流会）の取組

・目的

- ①学校と家庭の関係を“切らない・育む・深める”こと
- ②学校生活を送るうえでサポートが必要な保護者同士が交流を深めるなかで、保護者自身の孤独感を減らすこと
- ③保護者と教員の交流を通して家庭と学校が連携して生徒のサポート関係を構築すること

・内容及び特色

- ①2 か月に 1 回、土曜日の午後に開催
- ②スクールカウンセラーも参加
- ③横と縦のつながりを大切に
- ④体験活動と茶話会 例）調理、フラワーアレンジメント、心理検査、コラージュ等

平成 30 年度 COCORO 食堂利用状況（延べ人数 50 名・実人数 29 名）

No.	2018年度 平成30年度	性別	H30年度				合計
			第8回 H30.6.12	第9回 H30.9.15	第10回 H30.12.1	第11回 H31.2.16	
1	1年2組	女	○				1
2	1年2組	男			○		1
3	1年3組	女	○	○	○		3
5	1年3組	女		○	○		2
4	1年3組	男	○				1
6	1年4組	男	○				1
7	1年4組	男	○	○	○	○	4
8	1年4組	男	○				1
9	1年4組	男	○				1
10	1年5組	男	○				1
11	1年6組	女	○			○	2
12	1年6組	女	○				1
13	1年8組	男	○	○		○	3
14	2年4組	男	○				1
15	2年4組	男	○				1
16	2年5組	女	○				1
17	2年5組	女	○				1
18	2年5組	女	○				1
19	2年5組	男			○		1
20	2年5組	男	○	○	○	○	4
21	2年6組	女	○				1
22	2年6組	女	○		○		2
23	2年8組	男	○			○	2
24	2年8組	男			○		1
25	2年8組	男	○	○	○	○	4
26	3年4組	女	○				1
27	3年4組	女	○	○	○		3
28	3年7組	男	○				1
29	卒業生	女		○	○	○	3
			24	8	11	7	50

平成 30 年度 COCORO 食堂参加者アンケート集計結果

COCORO 食堂参加理由（上位回答）比較

「ものづくり」「心理テスト」「おしゃべり」「調理実習」が人気であった。「ものづくり」や「調理実習」は作業中に自然な会話や助け合いの環境が生まれやすく、作業終了後の茶話会の時点で関係性が構築できている。また、「心理テスト」で保護者自身が自己の内面を知りたい（見つめなおしたい）ようである。「心理テスト」が保護者自身の振り返りや自己理解を深めるきっかけとなつてほしい。COCORO 食堂で大切にしているのが「おしゃべり」である。COCORO 食堂では発言を否定することはない。またものづくりにおいても作品の素晴らしさを全員で共有している。

本アンケートを通して、COCORO 食堂の目的や基本的な流れと参加保護者のニーズの間にずれがないことがわかった。次年度以降も COCORO 食堂は『体験＋茶話会』を軸に、参加された保護者一人ひとりの自己肯定感の向上と前向きな親子関係の構築と子供理解を深めるお手伝いができる場としての意識をもって継続的な活動を行っていきたい。

《アンケート結果を見て》

アンケートの結果を見ると、参加者に 1 年の保護者が多いのは、COCORO の部屋や COCORO カフェにも共通する特徴です。いろいろな支援があることに、入学前の学校説明会の段階から関心を持っていた結果であるともいえます。さらには、まだ学校に慣れない 1 年生が、支援の場として、資源を活用していることの現れでもありますので、今後も長期的に継続できればと思います。さらに、参加 3 回以上の方の割合が高いことも、昨年度に引き続いての特徴でした。リピーターが多いという結果は、COCORO 食堂の成果とも言えますし、保護者のニーズが高いことを反

	平成 30 年度アンケート結果		平成 29 年度アンケート結果
1	以前に参加してよかったから	1	子育てのヒントがほしかったから
2	保護者仲間がほしかったから	2	保護者仲間がほしかったから
	悩みを聞いてほしかったから		学校の情報が聞けると思ったから
4	内容が楽しそうだから	4	内容が楽しそうだから
	子育てのヒントがほしかったから	5	悩みを聞いてほしかったから

映していると読み取ることもできます。一方、参加したことがない保護者を開拓する方法を考え、初めての保護者が参加しやすい雰囲気を作る工夫も必要かもしれません。

参加理由を見ると、「以前に参加してよかったから」というリピーターの声が多いですが、次いで「悩みを聞いてほしかったから」「保護者仲間がほしかったから」という意見が多いという結果から、保護者が孤立し一人で悩みを抱え込んでしまいやすい状況がうかがえます。お茶会の中でも、互いに子育てのしんどさを共有したり、先輩としての体験からヒントをもらったりという場面もあり、ピア・サポート的な効果が非常に大きいと感じました。担任教員が COCORO 食堂に足を運んで、参加の保護者と対話する時間を作ってくださいという場面もありました。ふだんとはひと味違った場で、保護者と教員の出会い直しができるのも、COCORO 食堂の成果の一つと考えます。今後は、保護者の皆さんが楽しく仲間作りができる場を提供すると同時に、学校と家庭をつなぐ交流サロンのような位置づけとなればと思います。また、COCORO 食堂では十分に話せなかった保護者の思いをじっくりと聴くためにも、COCORO の部屋（個別カウンセリング）につなげるというあり方も工夫していきたいと思います。

平成 31 年 2 月 27 日 スクールカウンセラー 伊藤美奈子

（主な成果）

本校のスクールカウンセラーは、COCORO カフェのスーパーバイザーであるが、同時にカウンセリングを受けた生徒を COCORO カフェにつなぎ、継続して生徒の様子把握に努めている。また、COCORO 食堂では内容の助言だけでなく、保護者との直接の交流を通して関係性の構築に励んでいる。COCORO 食堂の参加がきっかけで COCORO の部屋（個別カウンセリング）につながった保護者もいる。教育支援部とスクールカウンセラーが「COCORO カフェ」、「COCORO 食堂」、「COCORO の部屋」を三位一体となって運営することで生まれた相互連携が各々の取組に相乗効果をあげたと考えられる。

（3）その他

- ・中間報告会「金光藤蔭シンポジウム 2018」の実施

「金光藤蔭シンポジウム 2018」実施要項

目 的	文科省の委託事業である「発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業（特別支援教育の視点を踏まえた学校経営構築研究開発事業）」の中間報告をすることで、金光藤蔭の丁寧な教育の方向付けをし、また教育活動の一環として広く発信する
日 時	平成 30 年 7 月 6 日（金） 15 時 30 分～17 時
場 所	関西福祉大学金光藤蔭高等学校 会議室（予定）
対 象	本校生徒の出身中学校教員・本校教職員
内 容	15：30 学校長挨拶 15：40 事業の中間実践報告（和田・的場・稲垣） 15：40 パネルディスカッション（コーディネーター 大阪教育大学 須田正信教授） 16：30 基調講演（まとめ） 大阪教育大学 須田正信教授 16：50 質疑応答 17：00 終了

【受諾の経緯】

文部科学省において、平成 24 年に実施した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」では、公立の小・中学校の通常の学級においては、学習面又は行動面において著しい困難を示す児童生徒が 6.5%（推定値）程度の割合で在籍していることが明らかになっている。このような状況の中、教育現場では、特別支援教育の視点を踏まえた学校経営に取り組む必要があり、授業を担当する教員においても、学習上つまづくポイントを意識した指導に取り組まなければならない。これらを踏まえ、文部科学省では上記の事業を、（1）特別支援教育の視点を踏まえた学校経営構築研究開発事業（2）発達障害の可能性のある児童生徒等に対する教科指導法研究事業 の内容で公募した。

本校は（1）に応募し、事業を平成 29 年度・30 年度と 2 年間にわたって委託されることとなった。

【本校の背景および提案理由】

本校の生徒は、背景（家庭）に多くの課題（一人親世帯・生活保護世帯・ネグレクト等）を抱え、生活習慣や学習習慣が身についていないケースが多い。また近年、発達に課題を抱える生徒（療育手帳を所有する生徒も在籍）も増加し、併せて不登校生徒も増加傾向にある。このような生徒が多数在籍する本校において、特別支援教育の視点を踏まえた教育活動をどのように展開していくかが喫緊の課題であり、今後本校が私立学校としての存在意義を見出すためにもこの事業に取り組みたいと考えている。

平成 29 年度より、不登校傾向であった生徒を対象にスタートした「エンカレッジコース」では、入学前面談・高校生活カードをもとに全員に個別の教育支援計画・個別の指導計画を作成し、特別支援教育の視点を持って教育活動を展開し始めている。

創立 92 年目を迎えている本校がこれまで培ってきた人権教育を土台にしつつ、あらたな特別支援教育の視点を踏まえた教育活動が求められている。個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成も大阪の私立学校の中では、早期に作成に着手し、その内容の検討等を行きながら作成・活用している。また、発達障害のある生徒が多数在籍する本校で、教職員等への発達障害に関する理解啓発・専門性の向上が強く望まれる。事業に取り組み、支援教育の体制を整備することで、生徒一人一人により一層きめ細やかな指導をしていければと考えている。

【特別支援教育の視点を踏まえた学校経営構築研究開発事業運営協議会】

No.	所属・職名	備考
1	安元祥二・校長	特別支援教育専攻修士
2	須田正信・大学教授（特別支援教育）	
3	和田実穂子・教育支援部長	
4	的場恵美・養護教諭	
5	稲垣陽一・生徒指導部副部長	

（主な成果）

シンポジウムを開催することで、生徒の出身中学校に本校の教育活動を紹介することができたことは大きな成果となった。また、校内への事業内容の浸透性が高まったといえる。

多くの教職員協力のもと、シンポジウムを成功できた。

台風が重なり、悪天候による交通状況の乱れで、予定していた参加校が欠席となるアクシデントもあったが、資料一式を参加予定であった中学校に後日送付した。

※資料として作成したリーフレットを添付

④ 特別支援教育コーディネーターの負担軽減のための体制の在り方

- ・人数 2人
- ・1名—教育支援部長→校内支援委員会の招集・運営、学校長・外部専門家との連絡窓口、生徒相談、保護者相談、教員相談
- 1名—養護教諭・教育支援部副部長→スクールカウンセラーとの連絡窓口、カウンセリングの窓口、学生スタッフとの連絡窓口、生徒相談、保護者相談、教員相談
- ・特別支援コーディネーターとしての軽減はないが、部長職としての授業軽減あり。
養護教諭は軽減なし

- ・特別支援教育コーディネーターとして職務に従事している時間数は、不明
日々の業務の中で、重なり合ってコーディネーターとしての仕事がある
- ・特別支援教育コーディネーターの選任方法は、本校の場合校長による指名である
生徒の教育相談等の任務を長年経験し、カウンセリング研修等の生徒にかかわる様々な研修会に参加し、経験と教養等を身に付けているものが望ましい
- ・1名—教育支援部長（任期は不明） 1名—養護教諭・教育支援部副部長（任期は不明）

5. 今後の課題と対応

本事業の取組を終えて、今改めて本校が取り組むべき課題、向かうべき方向性について考えている。まず、入学前面談やコンサルテーション等を通して、課題のある生徒の実態把握はできるようになった。そこから個々へのきめ細やかな対応を、個人レベルでなく学校体制としてどのようにとっていくのかということについても少し前進した。

（1）中高連携の情報共有の充実

今後の課題は、その最初の段階での中学校からの引継ぎ内容の具体化があげられる。中学校から具申書が添えられた生徒に関しては、全て入学前面談を行うことになっているが、その具申書の内容が支援につながるような具体的なものではない。そこで、次年度からは具申書の様式を改編して、こちらが必要な情報を得られるようにしていきたいと考えている。中高連携が強化されることで、生徒ひとり一人の育ちと学びを引き継ぐことができる。

（2）保護者交流会の充実・発展

保護者交流会が定着してきていて、本来の目的をしっかりと達成してきてはいるが、参加者までもが定着してしまう傾向にあるため、門戸を広げ、より多くの保護者に参加してもらい、ピア・サポートの輪を広げたい。

（3）教員の意識改革

教員に関しては、テーマ「My Revolution～教員の意識改革～」を目指し、動き始めて少しずつ意識改革されているように感じる。さらに今後、さまざまな取組や実践を合理的配慮の視点から検証し、学校全体としての取組としていければと考えている。引き続き、本校の課題として特別支援教育の視点を踏まえた教育活動の展開を掲げる。なぜなら、この姿勢こそが、本校において障害のある生徒の教育的ニーズに基づく適切な指導と特別支援教育を推進させる原動力となり、障害者の権利に関する条約に基づくインクルーシブ教育システムの構築と共生社会の形成に繋がっていくと信じているからである。

6. 指定校について（高等学校）

拠点校名：関西福祉大学金光藤蔭高等学校											
		第1学年		第2学年		第3学年		第4学年			
課程	学科	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数		
全日制	普通科	281	10	246	9	247	9				
通級による指導(対象者数)											
	校長	教頭	教頭補佐	教諭	養護教諭	栄養教諭	講師	事務職員	特別支援教育支援員	スクールカウンセラー	その他 計
教職員数	1	2	2	44	1		20	9		1	18 98

※特別支援教育コーディネーターの配置人数：2名

※通級による指導の対象としている障害種：なし

7. 問い合わせ先

組織名：

- | | |
|-------------|------------------------|
| (1) 担当部署 | 金光藤蔭高等学校・教育支援部 |
| (2) 所在地 | 大阪市生野区小路東4-1-26 |
| (3) 電話番号 | 06-6751-2461 |
| (4) FAX 番号 | 06-6751-2470 |
| (5) メールアドレス | wada@konkoutouin.ed.jp |

資料A

アンケート結果

●担任・副担任として（過去に取り組んでいたことも含め、お聞かせください）

HR 教室設営など

- ・心にもいつも思いやりと敬意を。自分に厳しく他人にやさしく
- ・実習授業作品の展示をする。（懇談時、藤蔭祭、日ごろから）
- ・連絡することが多い場合、要点を板書する。
- ・黒板、チョーク受けをきれいにする
- ・連絡は掲示する
- ・大きめの時間割
- ・クラス全員に役割分担されるようにする
- ・グループでの教室整備や集団行動で社会性を学ばせる
- ・花や観葉植物を置く。あたたかく、活気のある HR に
- ・机の整理、環境整備、清掃（窓ふき）毎日
- ・机を並べやすくするように各自にしるしをつけさせる
- ・生徒に改善を促すときは、わかりやすい文章にし、A3 版で教室の壁に貼る
- ・ニュースや感動話を話し、関連させて気を付けてほしいことを話す。
- ・遅、欠のデメリットを話し、朝きちんと来ている生徒がよかったと思える話をする。
- ・掃除は 3 人 1 組（逃げられないように）
- ・終礼時に 1 日の授業の振り返り
- ・複数のことを同時にできない生徒が多いので、1 つに絞って係をさせ、ほめる
- ・保護者に弁当をお願いした。教室のごみの量が減り、清潔感を保っている。
- ・全員に委員や係を与え役割を書いたポスターを貼り、一人ひとりに責任感を持たせた。
- ・朝礼時に必ず窓を開ける
- ・窓の汚れは 1 日の終わりに必ず拭く
- ・行事で撮った写真はなるべく飾る
- ・掲示物はシンプルに。
- ・黒板のまわりには掲示物は貼らない（授業に集中させるため）
- ・余分な掲示物はしない。黒板や床が汚く授業担当者がやる気をなくす空間を作らない。
- ・教室は美しく。机の前後左右をそろえる。チョーク受け、クリーナーをふく
- ・掲示板の情報を古いままほっておかない。（掲示板を見ない習慣をつけさせないため）
- ・支援が必要な生徒がパニックになってもすぐに教室を出られるように入出口付近に。
- ・掲示物はマスキングテープで貼る。（はがしやすく、ふちに彩がでる）
- ・机、いすをきっちりならべる。掲示物をきっちり貼る。教室や棚の中も整理整頓。
- ・できるだけものを置かずに机周りをすっきりさせる

全体への指導・声掛けなど

- ・短く、シンプルに話す。特に重要なことについては、先に要点の数を述べてから説明
- ・前向きな声掛け 例）明日欠席するな→明日も元気に登校すること
- ・とにかく教室をよい環境にすることに全力を尽くす
- ・黒板の端や、後ろの黒板を利用して大切なことを書く
- ・必ず名前を呼んで注意する。注意の仕方も「前を向く」など具体的に
- ・試験前は、試験日程、試験や提出物の範囲、提出物チェックシートをまとめて配布

個別指導

- ・急な時間割変更や教室変更は板書だけでなく個別に紙を机に置く。
- ・配布物や重要なお知らせのある場合、生徒へ伝えた後に、Web で内容を送信している。

- ・話すことが苦手な子には、「書く」ことで気持ちを吐かせ、書くことが苦手な子に対しては、話をよく「聞く」ようにする。
- ・学期に2回は個別に（二者）懇談を行うようにしている。
- ・個別に伝えたいことはフセンに書いてその生徒の机にはる。
- ・保護者へのこまめな連絡。その際、生徒のことをかならずほめる。いい所など。
- ・全体への連絡の後、再度気になる生徒へ確認することを伝える。
- ・自分の生活を目に見えるかたちにするため、生活記録シートをクラスでやってみようと思い、形式等検討中です。生活習慣だけでなく、“気分”“体調”にも着目させ、セルフケアの助けになるような指導ができればと思っています。
- ・親との連絡を密にする。逃げる場所を用意する。
- ・訊かない、聴く。

●教科担当者として

授業の方法

- ・教科書に書いてあることだけでなく、付加知識を伝えられるように授業を展開する。また、教科書等の説明が正しいかどうか検証する力を育てるようにしている。
- ・わかりやすいプリントを使つての授業を心がけた。
- ・教科書を読む（読ませる）→説明する→ワークシートに記入させる→本日のまとめをする。
- ・板書の時間と説明の時間に分けて、説明を聞く時間と、ノートを書く時間に分けている。
- ・毎授業同じ方法で板書する。
- ・「書く・聞く・考える・答える」の4つの作業を1授業の中に組み込む。（どれかひとつ苦手でも、別の作業なら得意かもしれないので）
- ・声の大きさやチョークの色分けに注意して書く。必ず漢字にはふりがなをつける。
- ・ノートを作成させている。分かりやすく工夫し、自分だけのノートを作るよう心掛けさせている。丁寧に書き、情報を整理する力を身につけさせる。
- ・チョークの色づかい3色は使用し、全体に見て大切なところをわかりやすく大きな字1日1面以上にならないようにする。
- ・机間巡視を多くしている。
- ・黒板に先に書いてから、その部分についての説明をする。つい、先に説明をしてから板書しがちだが、本校の生徒には目に見えたものからの情報の方が頭に入りやすいようである。←生徒からの要望で、このように変えた。また、書くスピードが大変遅い生徒が多いことも本校の特徴である。全員が書き終えてから説明できるように、板書の一部を空欄にし、書くのが速い生徒が考えられるようにし、暇な時間を作らないようにする。科目によっては、毎回授業内テストをし、定着させる。
- ・どの項目でもユニバーサルデザインを心がける。
- ・説明はシンプルに、話題が広がりすぎないようにする。授業の最後10分程度は授業振り返りプリントなど作業中心にし、静かに反復練習させる。
- ・なるべく全員が発言できるようにする。
- ・プリントを作成し、単位ごとにナンバリングしたものを使用している。内容は、生徒が記入する箇所は全て（図以外）穴埋め形式にし、漏れがないよう配慮している。
- ・話は手短かに、例え話をしながら簡潔にまとめる。敬語。
- ・生徒に待たせる時間を減らす。→板書するものをあらかじめ紙に書いて、授業の時は黒板にマグネットで貼るだけ。
- ・写真やイラストなどを導入で用いる。（視覚的な情報をインプットさせる）

授業中 全体への指導

- ・速くできてしまう生徒のために、問題集を一人ずつ持たせているのでやらせている。
- ・重要点は、何度も繰り返して説明し、次の授業で確認（復習）している。

- ・理論的説明、感覚的説明、視覚的説明を心がける。
- ・漢字が苦手な生徒が多いので、ふりがな、筆順にふれ、画数の多い漢字などは別途拡大して色を変えて説明する。デクレシアが予想される生徒がいるかもしれない。
- ・言葉使いは以前より気を使いながらしている。声の強弱を使いインパクトを与える。
- ・問題を解いたら見て欲しいという生徒が多いので、一人ひとりチェックを必ずします毎回その時間に行ったことの復習小テストをします。

授業中 個別指導

- ・次の授業のテーマを伝え、どのようなことに興味があるかを聞いておく
- ・机間巡視の重要性。コミュニケーションをとる手段としても
- ・目配り、気配り（できないことを戒めない、できることを探してランクアップさせる）
- ・ノートをとる、話を聞く、が難しい生徒には教材を出させるところから根気強く
- ・毎回のノートチェックで個々の理解度をその都度チェック
- ・板書が書き取れているかを必ず見に行く。
- ・ついてこられていない生徒を待つ。全体には話をしたりして間を持たせる
（一生懸命な場合。さぼりの場合は終わってから必ず注意）
- ・判別できない字を書く生徒には指導しない。逆にほめることもある
- ・筆圧、鏡文字、行の乱れなど、ノート点検の際などに課題を把握するよう心掛ける
- ・提出物に書いてあることは関係の有無にかかわらず、触れている（落書きは叱る）
- ・造形的な観点から考える力を養うため、作業内容と目的が一致するように伝える

授業外

- ・ニュースなどで、常に関連する話題や情報がないかアンテナを張っておく
- ・廊下での声掛け
- ・挨拶を大切にす。
- ・空気を読む
- ・いつでも質問を受け付ける（そのための声掛けをする）
- ・個々の成長が感じられたら、授業外の一人の時などにほめる
- ・忘れっぽい子などにこまめに声掛け
- ・廊下での何気ない会話を大切に（欠席した生徒などに声掛け）
- ・字が苦手な生徒に個別に指導
- ・担任との連携をとる
- ・ノート提出の際には必ずコメントをする
- ・放課後学習での低学力生徒の引き上げ
- ・教材研究を深化させる努力。文化や慣習にも触れる

●全教職員 （生徒との関わりの中で心がけていること）

- ・簡単に答えを与えず、考える「間」を与えるよう話し方を工夫している
- ・理解度の違いなどを考慮し、よくかわりあうことが大切
- ・先入観で関係性を築かない
- ・無視されたという感情を持たせないよう、普段から声掛け
- ・ほめる。改善すべきところも伝える。
- ・相談にはのるが、最終的に生徒自身が考え決定できる環境にする
- ・学年、教科で生徒の性格、特性を共有することでよい対応を見つける必要がある

- ・ かかわりの薄い生徒とは廊下での声掛けなどを通して「気づき」を大切にしている
- ・ 抽象的な表現を避ける
- ・ 教科担当者との密な連絡により、担任としてわからない情報を得る
- ・ 聞いてあげる時と自分で頑張らせるときの境目をしっかりと持つておく